

無事,戻ってきました:ロシア・サンクトペテルブルグ 留学記

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/31508

【留学報告】

無事、戻ってきました。

～ロシア・サンクトペテルブルグ留学記～

I'm back, safely.

金沢大学大学院医学系研究科がん医科学専攻機能再建学
(整形外科科学)

高 田 宗 知

<何故、ロシアに?>

きっかけは、土屋弘行教授からのメールでした。

『「日露若手研究者フェローシップ」という奨学金があるが、応募してみないか?』

脊椎と四肢の全てを守護範囲とする整形外科では、手術の種類も多く、部位ごとにエキスパートが細分化されています。その中でも「骨の変形や短縮」, 「化膿性骨髄炎」, 「偽関節」といった疾患を扱う「創外固定法」が私の専門です。症例は少ないが一人ひとりに手間も時間もかかる, 経過中にトラブルもあり手術も複数回にわたる, さらに, 保険の点数でもあまり評価されない, というタフな分野ですが, 長くやっていると, 難しい症例に対して「絶対的な正解」のない術前計画をとことんまで煮詰める過程がたまらなく面白くなってきます。

「創外固定法」とは簡単に説明すると, 皮膚越しにワイヤーなどを骨に挿入し, 体外で金属製のリングと棒を用いて組み立てた「創外固定器」に連結し, 骨に切れ目を入れ, 少しずつ「創外固定器」を変形させることで, 曲がった骨, 短い骨を矯正する, という治療法です。徐々に広げることで, 切れ目の部分に漸次, 新しい骨を作り出すことを「骨延長術」と呼びます。組織を新しく作り出すという治療は他に類を見ず, 興味深いものです。

この「骨延長術」を確立したのがロシア人医師, イリザロフ (Gavriil Abramovich Ilizarov: 1921-92) です。創外固定器を用いた革命的な治療は, 冷戦時代, 鉄のカーテンを超えて, イタリア, アメリカ, 日本へと広まり, 現在, 「創外固定法」にたずさわる整形外科医で, 彼の名を知らないものはありません。「イリザロフ法」は「創外固定法」とほぼ同義語として用いられることもあります。

こうした背景があり, イリザロフ法発祥の地へ行ってみたかった私は, 迷うことなく応募することにしました。

<フェローシップ>

1年間の滞在を援助してくれたのは, 「日露青年交流センター」という外務省管轄の国際機関です。日露両国の若い研究者を招聘・派遣し, 人脈形成や研究活動を行う機会を提供するという目標で1998年に設立され, 毎年約10名ずつ, 日露両国の研究者をお互いの国に派遣しています。これまでの派遣者リストをホームページで確認することができますが, 「ロシア史」や「ロシア文学」などロシアを専門とする研究者が名を連ねています。

一次の書類審査を通過し, 面接と小論文による二次試験のために霞が関の外務省まで行ってきました。

試験対策として図書館からロシア関係の本を何冊か借りてきて読んでみたところ, 成熟した国民性をうかがい知ることができました。日本で流れるロシア関連のニュースは悪いイメージのものが多く, 得体の知れない怖さを感じますが, 実際は共産主義時代の恩恵で国民の文盲率は日本と同じくほぼゼロであり, 制限された報道内容からもしっかりと政治の内容を国民が理解しているようです。

冷戦時代は科学力でアメリカと伍していた国です。人工衛星「スプートニク」も, 有人宇宙飛行士の「ガガーリン」もいずれも世界初です。振り返れば日本もすばらしい国ですが, 政治のニュースだけ見ていると「こんな体たらくでよいのか」と憤りを感じるが多々あります。ロシアにもそんな政治のイメージと, 市民の実像に隔たりがあるのでしょう。

さいわい試験には合格しましたが, ロシア語も話せない「ロシア素人」を派遣しようと決めた面接官には逡巡があったかと思います。フェローシップの目的は「ロシアとの関係発展の人材を育成する」ことです。(不謹慎ですが, 北方領土問題があるために奨学金を出してくれると言えます。) 日本人を代表しているという気持ちを忘れず, 研修を通じてロシア人と良好な交流を行うよう, 日々つとめました。

<サンクトペテルブルグへ>

留学先としてロシアのサンクトペテルブルグにある Vreden Russian Research Institute of Traumatology and Orthopedics を勧めていただきました。創外固定が盛んなロシアにおいても, 第一線で活躍されている Leonid N. Solomin 教授の研究室があります。

サンクトペテルブルグはスウェーデン軍に対抗する要塞として, 1703年, ピョートル大帝によって建築されました。以来, 帝政ロシアの時代は首都として, ロマノフ王朝の栄華, ナポレオンとの戦い, ロシア革命, ナチス・ドイツとの戦いなど短い間に様々な歴史を経験してきました。現在もモスクワに次ぐロシア第二の都市であり, 約450万の人口を有します。世界3大美術館の一つであるエルミタージュ美術館や, 美しい街並みなどから観光都市としてはモスクワよりも人気があります。しかし近年, トヨタや日産の工場が建設されたといっても, 日本人はこの大都市に約200名しか在住していません。日本とロシア, 両国の付き合いの薄さをよく表しています。

<Vreden Institute>

「ロシアの医療から学ぶことがあるのか?」とは, 皆

から（ロシア人からさえも）よく質問されたことで、正直言うとも私に行くまでは若干の不安がありました。しかし、実際には良い意味で裏切られました。

Vreden Instituteは「ロシア整形外科の父」と言われるRoman R. Vredenによって1906年に開設されました。ベッド数は830床、擁する手術室は20室という巨大な病院で、整形外科医だけで200名以上、麻酔科医が約20名、そして内科医数名で構成されています。また、大学院生が研究を行い、学位を取得しており、「整形外科だけの大学病院」といった様子です。

Solomin教授率いる創外固定班では、週に3~5件の創外固定の手術があり、教授、主治医に次いで第2アシスタントとして、ほぼすべての手術に参加させてもらいました。始めのころは勝手が分からずに、もたもたすることもありましたが（何しろ、全てロシア語です）、半年もすると器具の扱いにも慣れ、「ずっとここで研修するように」とおだてられました。

Solomin教授は37歳で教授職に就任し、現在47歳、パワフルで何事にも情熱的な方でした。ロシアでは若くして業績を上げ、責任あるポストに就くドクターが多いようです。医局に隣接する教室からは常に大音量でロックやジャズが聞こえてきました。手術はスピーディーで、周りのスタッフを怒鳴り、急かしつつ、それでいてジョークが飛び交い、皆で笑いながら手術が行われました。ロシア人は普段の会話でも「真剣に喧嘩しているのでは？」と傍らで聞いていて、はらはらすることがありますが、かと思いきや、急に二人で笑いだしたりします。そんなロシア流の会話にも慣れました。

研究室では独自のヘキサポッド創外固定器 (Ortho-SUV frame) を開発し、臨床応用していました。ヘキサポッドとはフライトシミュレーターで用いられる6本の柱を持つ立体構造であり、自由に変形を矯正できるシステムとして10年ほど前からよく用いられています。私の研究は「ヘキサポッドを用いた足部の変形矯正」というテーマが与えられ、プラスチック骨モデルにさまざまなタイプの創外固定を組み立て、その矯正可能角度を検討しました。

また、研修コースは確立されており、イリザロフ法の基本から、それを発展させたSolomin教授独自の創外固定法など、系統立てられたレクチャーはとても勉強になりました。

＜ロシアの生活＞

サンクトペテルブルグに着いてすぐ、領事館で安全についてのブリーフィングを受けました。強盗、暴行、窃盗、すり、恐喝など、いかにここが危険かという資料を見せられ、「常に後ろに気を付けて歩く」、「毎日の通勤順路を変える」、「公共の乗り物は使わない」、「人込みには近づかない」ようにと（無理な）注意を受けました。悪徳警官も多いようで、救いようがありません。通常、日本からの駐在員や領事には運転手付きの車が支給され、社則で外を出歩くことを禁じている会社もあるくらいです。しかし、それでは生活ができないので、地味な服を着て、まっすぐ前を向いて足早に歩き、貧乏なアジア系留学生という呈でバスやメトロを使って生活しまし

た。Student visaで入国したので、学生証を活用すれば月2000円くらいであらゆる交通機関を利用することができ、便利でした。

ロシアでは英語がほとんど通じません。一時期、領事館の方に家庭教師を紹介してもらい、ロシア語習得に励んでみましたが、その難解さと先生の厳しさに「一年ではとても時間がたりない」と、早々に諦めてしまいました。振り返るともったいない話です。

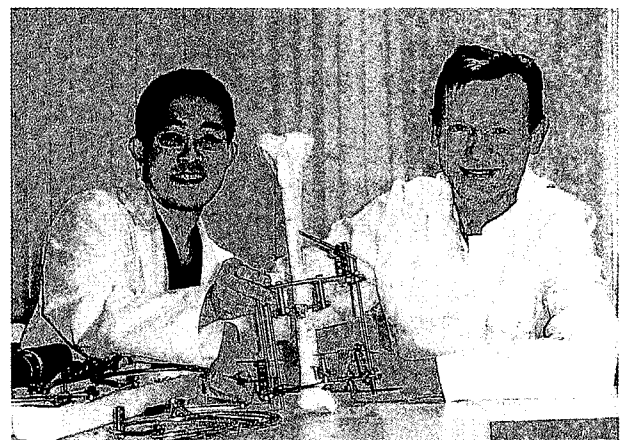
町は薄汚れ（ロシア人はビール瓶など平気で道端に捨てます）、バスもメトロも古く、錆びついています。アパートに住み始めてすぐ、エレベーターが停止して、40分間も閉じ込められたことがありました。冬も寒く、マイナス29度の世界を体験しました。

しかし、慣れてしまえばいずれもどうということはありませんでした。

さまざまな場面で周囲のロシア人に助けていただきました。感謝、感謝の繰り返しです。Solomin教授の奥さまには東奔西走して良いアパートを見つけていただき、生活で困ったことがあれば同僚が親身に聞いてくれました。医局は日本に比べるとかなり狭いですが、皆わいわいと、和やかに仕事をしていました。ロシアの職場ではその日初めて会う時と、帰り際の計二回、かならず一人一人と握手を交わします。誰かの誕生日があると昼間から皆でケーキを食べ、ウイスキーやコニャックなど強い酒で乾杯します。お世話になったお礼にと、何かイベントがあれば「海苔巻」を作って振舞うことにしました。サーモンを使ったロシア風ですが、作るたびに改良を重ね、「Sushi」好きのロシア人にも好評を博しました。

余暇にはエルミターージュ美術館を訪れたり、近くの大学のホールへクラシックやジャズのコンサートを聴きに行きました。学生証があれば美術館は無料、コンサートも400円くらいで（場合によっては無料で）聴くことができました。老若男女が集まるアットホームな雰囲気の中、本格的なコンサートが聴けたのはサンクトペテルブルグならではのかもしれません。

帰国してもうすぐ半年になりますが、思い返せば懐かしい記憶ばかりです。貴重な機会をいただけたことに感謝し、今後も臨床と研究に励むつもりです。



ハンズオンのあと、Solomin教授と記念撮影しました。